

2016年 司教年頭書簡 「御父のように、いつくしみ深く」

教区時報 2016年 11月号 巻頭言

10. いつくしみの相互関係

先に、「6. あわれみ深い人は幸い (信仰の実践的センス)」について、共に考えましたが、今回は、テーマ「10. いつくしみの相互関係」を取り上げてみたいと思います。テーマとして同じように見えますが、司教はこれを「共同体的センス」として語っています。ですから9月号で考察しました通り、ここでも神の側から、そしてその無条件の愛という観点から、このテーマも見る必要があるように思います。

9月4日、マザー・テレサの列聖式が行われました。ご存知のように、マザー・テレサは、神の慈しみを身をもって、その生涯の証しとすることによって、こんなに早く聖者の位に挙げられました。

しかし思うのです、マザー・テレサは貧しい人への慈しみの業を一方的に示されたのではなく、貧しい人々から、神の慈しみを受け取られたと。このマザー・テレサの貧しい人への感謝と賛美を見落としてはならないと思います。マザー・テレサは、貧しく小さくされた人への愛を伝えるだけでなく、むしろ貧しい人から受けられた、与えるより受ける喜びを味わわれたのだと思います。

列聖式には、彼女の遺徳、受けた愛や恩恵を感謝し讃えるべき 12 万以上の巡礼者のむれで聖ペトロ広場は一杯にあふれました。

聖ペトロ大聖堂の中央に大肖像画の垂れ幕が下がりますが、その垂れ幕のマザー・テレサの顔を見て、何となく恥ずかしげに見えました。たぶんマザー・テレサはこう思っておられたと思うのです。「あなた方は、今こうして私を讃えていてくれますが、本当は私があなた方を讃えたいのです。あなた方の中にこそ、小さくなられたイエスが生きておられる。そのイエスに私はひざまずきたいのです。あなた方はこうして、私を讃えに遠くからお越しになりましたが、あなた方の行かれるところは、ここではなく、あなた方の故郷(くに)の倒れている貧しい小さなキリストのもとなのです。そこで、小さくなられたキリストにあなた方の愛の手を差し伸べて下さい」と。

さて教書(年頭書簡)は「いつくしみ深い愛は、人と人との相互関係の中で体験されるもので、一方的な行為として実現されるものではないこと……」。例えば、ボランティアを行う人は援助する相手から予期しない喜びをもらっており、与える人が受ける人になっていると語り、また、思いやり、同じ思い、同じ心、同じ愛(フィリピ2・1～2)という言葉を使いながら、相互関係を語っています。

前にも述べたことですが、私たちが人間同士「互いに愛し合う」という時、「神」という視点がふと忘れられ、人道的、道徳的な隣人愛のレベルに留まってしまっておそれがあるように思えます。私たちキリスト者の愛はいつも神の愛から始まります。神が自分を必要とされ、

愛され、ゆるして下さっている。キリストの愛と慈しみが、まず私をとりこにしている。その事実と自覚から始まるのだということです。ですから、これを実行するには、神からの恵みが必要であり「愛の内に祈り求める」必要があるということです。

もう一つ大切にしたいことがあります。それはこの相互愛の根底にいつも「謙虚な心」が潜んでいなければならない。教書で引用されているフィリピ2・1～2に続く3節に「へりくだって、互いに相手を自分より優れたものと思いなさい」とあります。

あらゆる愛の根底に謙虚さがなければならない。私にとって謙虚さは、徳よりも、人間存在の本質、神との関わりの根幹となるものと思っています。謙遜とは「神の前にありのままにあること」、即ち神の前に「無にすぎないこと」、そしてまさにその時こそ神が全てとなられる。ここにこそ神と人、人と人との愛の交わりの始まりと、全てがある。人が神の前にこそ無になり謙虚になって立つとき、そこに神の慈しみと愛と神の命の息吹がゆらぎはじめる……のです。

(村上 透磨)

教区時報 2016年10月号 巻頭言

9. 自分を正当化しない

同じタイトルは、昨年の教書（年頭書簡）にも表れ、司教の深い心の思いを感じます。

それは、単なる重複でなく、むしろその内容を深めることにあると思います。ただ同じタイトルであっても、観点も引用されている箇所も違います。観点の違いでいえば、昨年はこれを「認識的センス」として語られていて、今年は「批判的センス」として語られています。昨年は自分の貧しさを理解し、謙虚に神の憐みにすぎること。今年は、自分の惨めさを自覚し、隣人を辱めたり、蔑んだり、神の救い（神の義と憐み）から破門しないこと（破門＝共同体からの閉め出し）つまり他者に向いています。

では今回も、引用されている聖書に従って考えてみたいと思います。

まず「心の貧しい人は幸い」（マタイ5・3）について。「心の貧しい人」とは、自分の「貧しさ」を知り、謙虚になり、自分を義としないだけでなく、罪人を救いの対象から除外しないという観点から「私は罪人を招くために来た」（マタイ9・13）という、貧しい人に向かうキリストの正当性（人となられた神の子キリストの本質）が語られます。

また私たちは、いけにえを捧げることによって、神の義（救い）を勝ち取るのだと思っています。でも、主は「私が求めるのは、いけにえではなくあわれみである」。(ホセア6・6)の言葉を使って答えます。この場合のいけにえは、罪のゆるしのために捧げられる供え物だけではなく、私たちの血を流すほどの愛の行い、即ち私たち人間の努力をも含めた徳行も含まれているでしょう。つまり私たちが自分のかぎりを尽して獲得した義ではなく、神の憐みと慈しみに満ちた愛の無償の賜物が救い（義）をもたらす。それを謙遜に認め、気付き、感謝と讚美の心を持って受け入れる事にあるということです。だから司教は「神の心を喜ばせるのは、みずから義人と思いががることではなく、謙虚に回心することです。人間は、神のあ

われみを受けているから、神の前で自分を正当化する必要はなく、反対に、あわれみに値しない己の醜さを素直に認めなければなりません。」と語ります。

教皇フランシスコが、信徒相互のいがみ合いを嘆いておられますと訴えますが、この互いのいがみ合いは、お互いが自分を正当化することによって起こるのだということでしょう。

最後に、その状態から救い出してくれるのは、神の憐みに包まれて謙虚になり、兄弟愛に結ばれることによってのみ解決するのだと説いています。

こうして次の「10. いつくしみの相互関係」のテーマへとつながって行きます。

(村上 透磨)

教区時報 2016年9月号 巻頭言

5. ゆるしの道具になりなさい

6. あわれみ深い人は幸い

少し大きなテーマになりますが、二つのテーマを一緒に考えてみたいと思います。と言いますのは、神の憐みとゆるしは、ほとんど同義のように語られるからです。もっとも、そのニュアンスは少し違うでしょう。「ゆるし」は罪を連想させますし「あわれみ」は、人間存在の惨さ（ミゼール）を想わせるでしょう。でも、罪にせよ人間の存在の貧しさにせよ、そこに揺らぐ神（の愛）に触れるということには違いありません（神の「シンバシー」＝「神の共感・共振する愛(なさけ)」をさします）。

先月号で、ヘブライ書による、神の大祭司キリストの憐みについて黙想しました。そこでは特に、キリストの十字架のあがないによる、神からの憐みの意味が語られました。今回は、私たちがその神からの憐みを効果的な「しるし」「道具」「証し」となるように招かれている事に、気付かせようと、されているように思えます。

ところでどうでしょう。私たちは、この呼びかけを聞いて「さあ、ゆるしの道具にならねば」「あわれみ深い人にならねば」と身構えます。ある程度の自信をもって、勇気をもって、熱意とほこりをもって、例えば「さあ人をゆるしてあげねばならない」とはりきって……。

でも、ちょっと思うのです。「あれ、そうかな？」って、そこで、司教が引用している聖書の箇所を読み直してみます。「7の70倍ゆるせ」というたとえ話（マタイ 18・21～）こんなこと普通の人間、特に自分のような者には、到底出来ない。神なら出来る。その神の愛があれば100分の1ぐらいにはゆるせるかも知れない。そこで、少しは勇気もわいてくる。すると、このたとえは神の愛はこんなに大きく、その憐みはもはや、はかりしれず、限りないゆるしに満ちていると言おうとしている。そして、その神の愛に気づいたら(……)何か出来る。やっpegらんとはげまして下さる。

次に、エフェソ書です（4・32）

罪がゆるされ、新しい「いのち」に生きるものとして「互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストにおいて(……)あなた方を赦してくださったように、赦し合いなさい」という言葉です。

ここで見逃し易い言葉は「キリストにおいて」ということです。神の憐みは、キリストにおいて示されている。これを聞き落すと憐みの業は単なる、隣人愛に留まってしまう。更に、この箇所は、4・30～5・4にひろげて読むことをお勧めします。すると、この聖書の引用の深みが分かってきます。

「憐み深い人は幸い」（マタイ5・7）も、この憐み深い方がまず神であると、司教が言っておられることにも注目したいと思います。そうでないと、それは単なる人道的な勧告になってしまう。ただ、人を本当に愛することが出来るのは、神の無条件の愛に気づき神に愛みされた人であると言っているのです（参照 ルカ6・36「6・27～38」）。

また、この「憐み深い人は幸いである」は、「義に飢え渴く人は幸い」（マタイ5・6）と対応するものであることを、知っておくのもよいと思われまふ。ここでの「神の義」は「神の憐れみ」と同意語であるということです。つまり、「神の義」は救いとなってあらわれ、「憐れみ」は「罪のゆるし」となって、あらわれることになるからです。

さて、次の言葉は、はっとさせられます。「これは、憐れみを受けている人は、憐れみを受けているから幸いなものではありません。憐れみ深くあろうとする幸いをいっているのです」さらに「神は私たちが憐れみの業をするから、憐れまれるのではなくて、神が憐れんでくださるから、隣人を愛することが出来るのです」という言葉です。

最後に、一ヨハネ3・17をもって、このテーマは結ばれますが、ここもその一ヨハネ3・11～4・21の文脈の中で読みましょう。

「行いをもって、誠実に愛する」ことが出来るのは、神が愛であり、その無償の愛が差別なく、すべての人を包んでいる、その自覚から始まるのです。

(村上 透磨)

教区時報 2016年8月号 巻頭言

4. あわれみ深い大祭司キリスト

ヘブライ書のおかげで、司祭職についての深遠な教えを知ることができます。

「大祭司イエス・キリスト」がヘブライ書の中心的テーマである事を誰も認めています。教書（年頭書簡）で引用される箇所はみなヘブライ書の初めの5章からです（2・17 4・16 5・1）。

まず2・17で、イエスは「あわれみ深い忠実な大祭司」と呼ばれます。

イエスは、神に対してビステイス（忠実）であり、人に対しては「あわれみ深い方」（エレモン）であるということです。「エレモン」というギリシャ語は、非常に少なく、他にマタイ5・7だけに使われているようです。しかも「大祭司」はラテン語で、ポンティフェクス（「橋かけ」という意味）があり、神と人との仲介者という意味が、キリストの大祭司としての称号に加わります。

さて、旧約の大祭司は、贖罪の犠牲を自分のためにもくり返さねばなりませんでした。

しかし、「罪のないキリストは、私達の罪を償うために、十字架上で御父の御心にかなう生

きた聖なる供え物として、ただ一度完全に捧げ、罪のあがないとゆるしを成し遂げられたと」書きます(ゆるしは神の憐れみの最も特徴的なものです)。さらに、この5章2～3節では「私達は弱さを身にまとっているので、無知に迷っているひとを「思いやることができます」と言い、弱さは「思いやり」につながると言うのです。

イエス・キリストは「神の子」(5・5)として、またメルキセデク系統の「永遠の祭司」として優れておられるだけでなく、新約の真の仲介者であること、動物の血ではなくご自身の血(命)によって新しい契約となられました。主が憐れみの大祭司と呼ばれる時、憐れみの神であり神の子であり、メシアであり、仲介者であり、愛の犠牲、奉獻そのものであること。言いかえれば、救いそのもの、神の憐れみそのものであることを意味します。

ここに見逃したくないことがあります。先の三カ所で「あわれみ」と記された言葉は、同じではないということです。微妙なニュアンスの違いがあります。2・17では、ギリシャ語で「エレモン」という特殊な言葉が使われています。5・2では「思いやり」というニュアンスがあるようです。この大祭司は、私達の弱さに同情できないような方ではありません。罪を犯さなかった以外は、すべてにおいて、私達のように、試みにあわれたのです。ですから私達は、あわれみを受け、また時機を得た助けの恵みをいただけるため、はばかりことなく「恵みの座(あがないの座、憐れみの座)に近づこうではありませんか」と、この言葉は、あのキリスト賛歌(フィリッピ2・6～11)、愛の謙虚のきわみを歌う賛歌につながります(ロゴス賛歌 ヨハネ1・1～18)。そこには、あのキリスト誕生の神秘と、過越しの神秘(死と復活)に私達を招きます。ひいては、それは父と子と聖霊の交わりの中に招き入れるものなのです。その神秘の中で、私達は、アッパ父よという祈りの関わりに入っていきます。実に主の祈りは父と子と聖霊のいつくしみの愛の中でくり広げられる、神との交わりそのものとなるのです。

(村上 透磨)

教区時報 2016年7月号 巻頭言

3. イエスのように「あわれに思う」

今回は、このテーマについて考えてみたいと思います。これは今年の教書(年頭書簡)の中心的テーマと思われます。

イエスは「御父の心を届ける方」ですが、その御父の心とは「あわれみ」であり、それは苦しみの共感に表れるとしています。

それは、イエスの宣教の開始の宣言であり要約でもあるルカ4・18～19の貧しい人への福音の引用で始まり「苦しみの共感」という言葉で結ばれていることから分かります。

つまりここでの「イエスのように憐れむ」とは、苦しむ人、罪人とされた人々へのキリスト・イエスへの共感を言っているのではないかと思います。

さてそういう人々に出会った時のイエスの心は、たんなる同情ではなく「深い憐みの感情からあふれる心から生まれる行動にある」と語ります。この「あわれみに思う」のギリシャ語

はスプラクニゾマイ（この語は「はらわた」腹を表す「スプラクナ」の派生語）つまり「腹がちぎれる思い、あるいは「肝ふるわせる」ほどの深い愛を指し、この愛をキリストは貧しい人、小さくされた人、罪人とされた人々に示されたというのです。

もともとヘブライ語には、おもに「ラハミム」と「ヘセド」という二つの言葉が使われ、それをギリシャ語に訳した時「スプラングナ」と「エレオー」に訳されたというのです。尚、詳しいことは、2月号で紹介した、司教の「用語説明」のパンフレット及び、教皇聖ヨハネ・パウロ二世の回勅「いつくしみ深い神」の注 52 などに説明してあります。ただこの二つの語を神の母性愛、父性愛に分けて考えるのは、よくないと言っておきたいと思います。

ところで問題はここにもあります。それはヘブライ語からギリシャ語、ラテン語、各国語へと翻訳されていく中で、それぞれの言葉の使い方、ニュアンス、理解の仕方に少しずつずれが出て来るということです。でもここで、私は懷疑や落胆にとらわれはしません。聖霊の働きを信じるからです。かえって「あわれみ」や「いつくしみ」には、日本人の宗教的センスが大いに豊かさを与えることになるかも知れません。

新約聖書では、先の二つの言葉がどのように使われているかと調べてみますと「スプラクニゾマイ」の用例は意外に少ないということです。この語は「憐みのたとえ話」とよばれるルカ 15 章、他にマタイ 14・14、15・32 などに出てきます。その主語はいつも神がキリストを指すというのです。また憐みから生み出される奇跡もすべてキリストの心をつき動かした、憐みによるものです（例えば、マルコ 1・41、マタイ 20・34、ルカ 7・13、マタイ 14・14、15・32 等々）

「エレオー」は旧約聖書の「ヘセド」の影響を受けながら、新約聖書では「人間の命に無関心ではいられない神の恵み深い創造の力」を指すというのです。例えば、盲人バルティマイの叫び（マルコ 10・47）他にマタイ 17・16、18・33、そして語句辞典を調べると「エレオー」は度々使われます。

そこには、自分の弱さを知り、自分の憐れな状態を変える神の力、救いの力を持つ方への嘆願の叫びがあります。

人間は人間同士、どんなに同情し合っても事態を変えることは出来ない。そこで、そんな力を持って神やキリストに憐れんでください「キリエ・エレイソン」と叫ぶ。マルコを読んでいると、盲人の「エレイソン」に続いて群衆の「ホザンナ」が続きます。それはまるで、ミサの中で「キリエ」が「グローリア」（栄光の賛歌）に変わっていくのを思わせます。

教書を読んでいて、はっとさせられたことがあります。使徒言行録 1・18 に「スプラングナ」が使われている。これは「ユダの腹わた（スプラングナ）が二つに裂けた」と書いてある所です。この箇所は、ユダの裏切りへの恐ろしい末路を描いているものだと思っていました。しかし、この時ペトロは「腹わた」が裂けたことを罰としてはなく、主キリストの御心が裂けたことを示す。あの荘厳な愛の死のシンボルとしてみていたのではないか、だとすればペトロはこの友の行為をたんに裏切りとしてではなく、愛する師の荘厳な愛の死のシンボルとして見ていたとしたなら…… ペトロは、ユダを弁護しようとしたのかも…… だとすれば、ペトロが理解した「主の憐み」は何と深いものか…… そんな憐みの神秘を司教は語りたかったのかも……。

（村上 透磨）

2. いつくしみのみ顔イエス

今回は「いつくしみのみ顔イエス」について考えてみたいと思います。

これは、教皇の大勅書のタイトルで観想するキリスト者の信仰の神秘の要約だとすぐに気づきます。

司教教書（年頭書簡）の（2）「いつくしみのみ顔イエス」は、大勅書（1）つまり、この大勅書の序文であり、特別聖年を祝うテーマの要約と言えるものです。司教教書（2）か、大勅書（1）を読めば、すばらしい黙想が出来ます。

父である神のことを完全に知るには、全てイエス・キリストを通して、聖霊の照らしによってしか悟れないということは、イエス・キリストご自身が確認しておられることで、私達も皆そう信じています。

しかし、ここに一つの疑問が起こります。では、旧約時代の人々は誰も、神の憐みや悲しみを理解できなかったのだろうか、「主よ憐れんで下さい」との叫びは空しい叫びだったのかという問いです。イエスに出会わなかった彼らは、主の憐みに出会わなかったのだろうか。そうではないのです。例えば、イスラエルの選びの原点は神の憐みであり（出エ3・7）律法締結も神の憐みによるのです（出エ34・6）。このイスラエルに対する止むに止まれぬ神の愛を、不倫の妻に悩まされて、もう愛せなくなった妻を捨てきれない預言者ホセアの愛を語りながら示します。またイザヤは母親の愛より強い神の愛を語るのです（例えば、イザヤ49・15）。

しかも特別聖年のモットーは「(14) 御父のように、いつくしみ深く」なのですが、これは神の愛が基準となります。つまり「神がご自分の全てをいつも無償でお与えになり、見返りに何かを求めることなく、願い求める時はいつも助けに来て下さる」ことを信じることに基づいているというのです（このことは、よい父親体験をした人には理解し易いのです）。

この神秘は聖女テレーズが描いた二つの絵に現われています。受難において示されたイエスの面影（まなざし）と幼児イエスの面影（まなざし）が一つであると申し上げたいのです。ここに深い神秘が隠されていますが……。

今一つだけ指摘したいのは、これはマタイ福音書の神学でもあるということです。即ち、マタイの馬舟に寝かされた、幼子イエスは、十字架上の死のベットで愛の死を遂げるキリストをすでに現しているのだということです。（これは聖書講座、「マタイを読む」で触れておきました）

最後に、特別聖年の「ロゴ」のことですが、はじめ、御父に抱かれた御子が見えたのですが、そうではない、人祖アダム（つまり私たち）。そして御子の目とアダムの目が一つということは、……この観想を深めることは、私達とキリスト、そして御父である神とも、神秘的な一致の感話と観想へと招くのです。 （村上 透磨）

8. 御父のように完全になりなさい

「御父のように」と言われると、思わずしりごみをしてしまう。「とうていそれは無理ですよ」と思ってしまふ。そこで「ように」という前置調の意味を探ってみます。すると「ように」には「従って」という意味もあるので、ここでは「同等性」を表すよりも「従い倣うこと」と解釈すべきだと思います。もう一つ大切なことは、聖書の言葉は、その文脈（即ちその文章の前後関係）に注意すべきです。山上の垂訓と呼ばれるこの教えの中で、主は神の国の義の原則的な教え（マタイ5・1～10）を述べた後に、あなた方への私の教えは律法を超越するもの、律法学者やファリサイ派の人たちの生き方以上の生き方をもとめ、神のみ旨を本当に行う生き方をしなければならない（マタイ5・17～20）と語り、律法の教えとして、彼らが大切にしていた善業（祈り、断食、施し）をあげ、それぞれ、その律法の本質に帰るべきだと教えるのです。

そして更にファリサイ派の人たちの義を超える義（マタイ6・1～18）を勧め、次に異邦人を超越し（マタイ6・19～34）、そしてキリスト者の卓越性（マタイ7・1～12）や生き方の新指針（7・13～23）を伝えようとしています。しかも、このマタイ5・48の直前に、天の父は、悪人にも善人にも太陽を昇らせ、雨を降らせる神。だれをも差別せぬ愛と恵みをくださる神の慈愛を語ります（マタイ5・45～46）。その結論として、「天の父が完全であられるように、あなた方も完全な者となりなさい」（マタイ5・48）

それと対応するのが、ルカの「あなた方の父が慈悲深いように、あなた方も慈悲深い者となりなさい」（ルカ6・36）ですが、なおそれでは言いたらないかのように語り続けるのです。ここでも文脈から理解すべきです。

ルカ6・20～49はフランシスコ会聖書訳によると

（ここからはフランシスコ会聖書訳参照）

まず、

6・20～26 幸いと不幸

6・27～35 敵を愛せよ

6・36 あなたの父が慈悲深いように、あなたがたも慈悲深い者となりなさい。

6・37～42 人を裁くな

6・43～45 良い木と悪い木

6・46～49 聞くことと行うこと

となっています。

敵を愛しなさい（ルカ6・27～36）はマタイ5・43～48とほとんど同じですが、ルカの特徴はルカ6・37～38にあります。ルカは人を裁かない（マタイ7・1～5と共通）だけでなく、「罪に定めない」「ゆるす」「与える」を加えていることに注目すべきだと思います。教書（司教年頭書簡）も、「完全な者になる」とは罪のない完璧な人間を目指すことではあり

ませんと、そして、神の似姿として創造された人間の目的、すなわち、神の愛を受けるにふさわしい者となるために、何事も愛を動機に、愛と目的を正しく識別し、出来ることは何でもやり尽くすことであり、これが、ファリサイ派の人たちや律法学者に優ることとなると語り、「神を愛する」ことは「律法を全うする」（ローマ 13・8）ことであり「完全な愛に至る」ことはキリスト者の召命であるとも述べています。ですから、このローマ書も（12章～15章を含めて）読まれることをお勧めします。

更に「愛は完全さをもたらす帯（コロサイ 3・14）」を語る個所（コロサイ 3・5～17）。

エフェソ 5・1 では、「神に愛された子として」「神に倣うものになりなさい」と語ります。

また、エフェソ 4・1～5・21 の個所なども参照して読むべきです。それから「神は愛である（一ヨハネ 4・7～5・1）」とのことから、全ての愛が生まれるのだと言う（一ヨハネ 2・7～4・21）ことに根拠を置くのです。また、対神徳と呼ばれるものの中で、愛こそ最高のものだということも私たちはよく知っています（一コリント 13章）。

さて、ここで言う徳は、何か勲章や飾りのようなものではなく、神の愛と霊、恵みと命による出会い（関わり）だということを忘れてはなりません。

最後に、ここに引用されている教会憲章（40）からは、「全ての人が聖性に招かれている」ことを語っていますが、そこで見落としてはならないのは、聖性を全うするための「聖霊の働き」と「祈り」の重要さです。父の完全性への招きに応えるには、人間は自分の不完全さを痛感し、神の助けなしには、この招きを達成することは出来ないことに気付かされます。そのため「聖霊の働き」と「祈り求める心」に深く根ざした私たちの「謙虚さ」が求められるのです。
(村上 透磨)

教区時報 2016年4月号 巻頭言

7. 放蕩息子の父親の喜び

教皇は、神のいつくしみについて観想するように勧めておられますが、その際すぐに思い浮かぶたとえ話は、「放蕩息子の父」のたとえ話です。実際、いつくしみの特別聖年公布の大勅書「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔（9）」にも、またヨハネ・パウロ二世の回勅「いつくしみ深い神（5・6）」と「和解とゆるし（5・6）」等に語られています。

ルカ 15章は、あわれみの三つのたとえ話（「見失った羊」・「無くした銀貨」・「放蕩息子」）が集録されており、多くの方はこれを「福音書中の福音」「福音の核心」と言います。最もよく読まれ、美しく語られ、深く黙想された教えであり、改めて解説する余地はないほどです。ですからここでいくつかの確認として、「神のいつくしみの愛」と「観想のための要点」をあげてみたいと思います。

まず「放蕩息子」と訳されますが、その原意は「失われた（ギリシャ語でアボリュミー）息子」です。「アボリュミー」は「本来あるべき所にいない」という意味なのです。息子たちが本来あるべき場、それは「父のもと」（家・愛・手……の中）なのです。その意味で「弟」は父の許を離れることによって「兄」は弟に対する父の心を否定することにより、「失われた

息子」になります。

このたとえの主人公は「父」ですから、このたとえのもう少し正確なタイトルは「失われた息子をあわれみ、取り戻そうとする父の愛の物語」です。

ところで、この弟息子と兄息子は誰を指すのでしょうか。それを表すのが、1節から3節です。兄は、自分を義とする律法学者やファリサイ派の人々であり、弟はあわれみを求めるより生きる道を知らない、罪人と呼ばれる人々です。改心は、人間の側からすれば、神に「立ち返る（改心、思い直し）」ことなのですが、それを可能にするのは、神の無償と無条件の愛なのです。それに気付く時、本当の「回心（神と関係を正す）」が始まります。

このたとえで最も注目すべき言葉があります。それは「父は、見て、あわれみ（ラハミム・肝動かされ）走り寄って……」という言葉です。

これは、私たちとあの「出エジプトの偉業」の観想へ（出エ3・7）、すべての人に及ぶ愛の交わりへ（ルカ10・34、また、マタイ25・40も）そして、死を越える永遠の命（ルカ7・13）の招きでもあります。

なお、この「父」は神をあらわす隠喩であることに注目したいと思います。つまり、これは神のあわれみのたとえであるという事なのです。

人間が人を愛することができるとしたら、それは神の無償の愛に出会うことによって可能になるということでもあります（ヨハネの手紙一4・7～21）。

さて、このたとえ話のもう一つの大切な視点を見落としてはなりません。このたとえを語られた目的は、兄息子（義人と自認する人）を説得し続ける父の思いを読み取ることです。父（神）はこんなに大きいのだ、それを理解してほしいと義人と呼ばれる人々（律法学者やファリサイ派のような人。また、信仰に忠実なキリスト者）に対して説得し続けている神の愛を語っているというのです。

ところで、このたとえを聞いた人々の反応は書かれていないという点も見落としてはなりません。その答えは、このたとえを聞いている私たち一人ひとりに課せられています。その問いはずっと私たちに向けられているのです。

もし私たちがその問いによりふさわしく応えるならば、私たちは失われたものでなくなり、神のもとに立ち返る事によって、神に大きな喜びをもたらすことになるのです。

私たちが立ち帰る時、神のその喜びはいかばかりでしょう。とすれば私たちが立ち帰ることは、神にとって「祝い」であり「宴」となるのです。それを思うと、「くいあらため（メタノイア・愛のため）」することは、私たちにとっても何と嬉しく楽しいことでしょう。

「ああ、よく帰った」

「ああ、よく帰れたね」

「共に喜び祝おうよ」

天における喜びの合唱。

それを聞きとることが出来たなら……

（村上 透磨）

いつくしみの特別聖年を歩む

司教の今年の年頭書簡は、特別聖年公布の大勅書「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」に込めて出された事は、承知していただいていると思います。今年も前年に続いて年頭書簡の解説(?)をお送りする事になり先月号では、全体の構成を私なりにまとめました。この全体の流れを頭に入れて一緒に考えてみたいと思います。

先ず、第一の戸惑いは「ミゼルコルディア」という言葉をどう訳すかという問題です。ヘブライ語では、主に「ラハヒム」と「ヘセド」という言葉が多く使われます。(この解説は、ヨハネ・パウロ二世「いつくしみ深い神」注(52)、また、先月号で紹介した司教書簡「解説書」《いつくしみの特別聖年に、知っておきたいこと》参照)。この二つの語の持つ意味は、あわれみ、いつくしみ、慈悲、慈愛、誠実(まこと)、同情、共観……など、多義にわたるものです。「心と心の愛のゆらぎ合い」、神の心と人の心が、その魂(存在の奥底)でゆらぐ神の息吹、神の霊、愛、命……を表します。でも本当は、この神秘をどう表してよいのか分からない。言葉にした途端、色あせてしまうようなそんな奥深さがある。

さて「ミゼルコルディエ・ヴルトゥス・ディ」は「御父のいつくしみのみ顔」と訳されていますが、それは「御父は見えない」が「イエスを見れば、御父とそのみ心、愛が見える」。つまり、イエスが中心なのだという事を見落とししてはならない。「神は愛」そのものに在すけれど御子イエスの姿を通してはじめて、はっきり見えてくるといっている事を忘れてはならないと思います。

確かに、御父は本質的にあわれみの神、人間の側に何が起ころうとも変わらない、愛であり続ける。人間が神を忘れて、離れたり、見捨てたりしても決してその愛は変わらない。

御子イエス・キリストと聖霊は、その愛の徴「秘跡」なのです。だから聖霊によって、キリストが示され、キリストによって御父が示されない限り、御父の御顔はあらわれないのです。

更に、もう一つ確認しておきたいことは、聖書において「正義と愛」は矛盾も対立もしないという事です。よく旧約の御父は正義で裁く神。それに対して新約の神は「愛とゆるしの神」であることを御子キリストを通して示されたのだというのです。でもこれは余りにも短絡的な神理解でしょう。その事は順を追って示されるでしょう。こういう「裁きの神・父」と「ゆるしの神キリスト」を峻厳に分けて語る事が多かった靈性の中で、幼きイエスのテレジアは、その誤解を見事に看破しているのです。

「私は神のあわれみにも信頼していますが、正義にも信頼しています」と、聖女は、神は本質的に「あわれみであり、そのあわれみが正しく示される時、神の正義」が実現すること、「正義」の本質的な意味を直観していたのです。

以上のようなことを確認して、私なりに理解したことを書かせていただきたいと思います。

1. いくつしみの神との交わり

先ずこのテーマから少し考えてみます。

「神との交わり」という言葉はとても大切です。「あわれみ」にしても「正義」にしても、いずれも「関わり」(交わり)」としてとらえねばなりません。一切の徳にしても恵みにしても、そういうものが抽象的に存在すると思われています。「神の義」というのは「神の差し出される愛の関わりが正しく実現する」という意味なのであり、それは殆ど愛と同意語になります。その関わりは創造の時に始まり、罪をおかしても、主(かみ)はそのあわれみといくつしみから去る事になり、罪を犯した場合それは、ゆるしとなってあらわれるというのです。この神の愛を「神の誠実」とも言います。それは、神が創造のはじめに、神が約束した善の思い(計画)を決して違えないという事です。それを神が、モーセを通して結んだ契約の言葉にあらわれます。それが、ここに引用される出エジプト 34・6～7の言葉です(これが契約の基本的な言葉です)。

私は「主」である、私の名は「あわれみと恵みに富むのである。それは忍耐強くいくつしみとまことに満ちるものである。そのため私の悲しみは幾千代(永遠にも及ぶ)、その約束として、罪と背きと過ちを赦すものである」と宣言する。神はそれを民がどんなに不忠を尽くそうとも守り続けます(ホセア2・21参照)。だから私たちはこのような神の「あわれみ」と「いくつしみ」に包まれて神に感謝せよ、そのあわれみは永遠に歌い、「主よ私をあわれんでください」と叫びつづけるのです。神はその嘆願の祈りに見事に応えて行きます。これが神と人との出会いの歴史(救いの歴史)であり、その頂点が、イエス・キリストなのです。
(村上 透磨)

教区時報 2016年2月号 巻頭言

いくつしみの特別聖年を歩む

今年も、年頭書簡を年間を通して共に黙考させて頂きたいと思います。

特別聖年の取り組みについての司教の具体的な指針の中で、緊急を要する二つの事を指摘しておきたいと思います。

一つは、巡礼が始まりますが、これは行事ではなく、また免償を獲得するための旅でもなく、心と魂、生き方の回心の旅であること。

二つ目は、いくつしみについての黙想を大切にすることと、特に四旬節の典礼を神のいくつしみの観点から黙想することです。勿論、年間を通して観想することです。

尚、2015年11月29日付で、司教が京都教区の皆様へ宛てた書簡『いくつしみの特別聖年を迎えるにあたって』と《いくつしみの特別聖年に、知っておきたいこと》をよく参照されますように。
(京都教区のホームページからでもダウンロードできます。)

http://www.kyoto.catholic.jp/new/topnews/mcd_syokan.pdf

次に、今年の年頭書簡の全体の構成を考えてみたいと思います。

年頭書簡の全体の構成は、次のようになっていると考えられます。

〔司教年頭書簡の構成〕

(序章) はじめに	→	御父のようにいつくしみ深く	
1.いつくしみの神との交わり	→	いつくしみ、神と人が一つになる道	— 神
2.いつくしみのみ顔イエス	→	いつくしみの出会いの秘跡イエス	御子キリスト
3.イエスのように「あわれに思う」	→	御子イエスのいつくしみ	
4.あわれみ深い大祭司キリスト	→	大祭司キリストのいつくしみ	
5.ゆるしの道具となりなさい	→	互いにゆるし合いのしるしとなり	
6.あわれみ深い人は幸い	→	あわれみの人となりなさい	御父
7.放蕩息子の父親の喜び	→	御父のいつくしみ	
8.御父のように完全になりなさい	→	御父のようにいつくしみ深く	人・交わり
9.自分を正当化しない	→	自己偽慢と一人よがり避けて交わり	
10.いつくしみの相互関係	→	愛の交わりを大切にする	
11.聖霊の導きにゆだねて人をゆるす	→	父と子と聖霊による交わり	— 神
(結び) 12.マリアとともに心の巡礼を	→	マリアのようにいつくしみに満たされ生きる	

※ 【かっこ】は、対応関係にあると思われます。

(村上 透磨)

教区時報 2016年1月号

『2016年 司教年頭書簡 御父のように、いつくしみ深く』掲載